

## 里の若者達

農山村で若手というと、最近では40代50代いや60代を示すことさえあると聞く。だがこの稿で取り上げる若者達は16歳～29歳まで、正真正銘の若者たちだ。筆者が地元で知り合い楽しく付き合わせてもらっている人達でもある。過疎で少子化、田舎には若者達がいなくとよく言われる。しかし少数ながらも田舎に自らの居場所を確保し、里作りの大きな力を秘めているのは彼らなのである。

筆者が事務局を務める角川里の自然環境学校（角川自然学校）は住民によって運営され、自然体験活動、文化伝承活動、里地里山保全活動を行い、先生役は地域のお年寄り達だということを以前に何度か触れた。その活動を支えるスタッフは、地元のおじさんおばさんたちだけではなく、地元の高校生、若手の社会人ボランティア、農家の若者達、そして地区外のボランティアメンバーが参画しているという実態がある。このことが角川の地域作りの持続可能性を高めているといえるだろう。

若者達というと、特に教育分野などでどちらかと言えば「問題」の対象として取り上げられることが多いのではないだろうか？角川自然学校にかかわっている若者達もやはりいまどきの若者達。「不良」っぽく見える者も多い。しかし、取り組みに向かう姿勢は真剣である。自然体験活動では、彼らは子ども達の良いお兄さんお姉さんとなる。ざっくばらんに話し、面倒見もよい。今の子ども達が何に関心があり、どのようにかまってやればよいのか、年が近い分知っているのかもしれない。確かに子どもたちと付き合うためには単に「真面目」なだけでは通用しないということがあるのだ。子ども相手のイベントで筆者もこうした若者達にどれだけ助けられたか分からない。

若手グループでは意見がまとまらなかつたりしてよく諍いが起こったりする。でも、それはよりよい活動をどうやってみんなで盛り上げていくかという、自分達の実現したい理想に向けた動きの中で生じていることが多い。仕事や学校で皆が忙しい中、日程調整をし、合意形成をし、活動を展開するのはそう容易なことではない。先日もなかなか集まらずに活動が停滞気味になり一悶着があったようだが、何とかまとまったようだ。なぜなら、彼らは最後まであきらめないからだ。もちろん、忙しさや他の分野への関心で活動から一旦離れていってしまう人もいる。でもそうしたメンバーとも自然につながりを保っている。だからこそまた戻ってくる人もいる。

こうした里の若者達のところには、地区の内外から様々な若者達が集う。彼らは情報を広く流し、関心のある内外の若者達と連絡を取り合って集まり、キャンプなどの大きなイベントをサポートしてくれた。そのような若者達は、結

構いろいろな特殊能力を持っている。魚捕り(釣り)の名人(もともと地区の子ども達もみんな川遊びの達人だが)、料理がうまい人、キャンプ活動に熟達している人、コンピュータが得意な人、機械に精通した人、介護を勉強してきた人、林業を勉強してきた人もいる。だから、今、角川自然学校は里の自然環境をフィールドにしている色々な人達と一緒にいろいろな取り組みをできるようになった。その一つ一つが農山村の地域作りの可能性を高めているといえるだろう。

将来像がなかなか描けない時代だからこそ、地域作りにかかわりながら夢を模索し、自己実現を目指そうとする彼らの純粋な姿勢には共感する。とかく若者達が集うと何か不穏な雰囲気を感じさせる今の風潮だが、地域がその活動を温かく見守り真摯にサポートしていくことで、里の若者達は地域に根ざして真に光を放つことができるのではないだろうか？だからこそ大人の役割は極めて大切で大きいといえるのである。先日の置賜の社会教育大会で聞いた地元のお父さんの話から「若者の一見無理に見えるような大きな夢も、周りの大人たちが少しずつ力を出し合い、見守ってあげればこの地域で実現できるんですよ」